

新潟県出雲崎港の歴史

出雲崎史学会 鈴木 豊 吉

新潟大学 正会員 鈴木 哲

A History of Izumozaki Port

in Niigata Prefecture

by

Toyokichi SUZUKI and Tetsu SUZUKI

概要

新潟県出雲崎は、日本海に面した海際に発達した細長い町であり、古代より北陸道の宿駅として栄えた。また、海岸線に平行して岩礁が多く、波浪のエネルギーを削ぐので、内側は天然の良港となり、漁業の町として現在に至っている。江戸時代には幕府の天領となり、代官所がおかれ、佐渡の金銀の渡海港・北前船の寄港地として栄えた。明治時代になると石油が採掘され、わが国の近代石油産業の発祥の地となった。この出雲崎の港の歴史を、自然条件の特徴や社会条件の変化から考えてみた。

1 自然条件

新潟県出雲崎は、新潟県の海岸線のほぼ中央に位置し、北西側は日本海で、背後に山がせまった海岸線に細長く発達した町である。出雲崎が古代より、港として栄えてきた大きな原因は、その恵まれた自然条件であった。(図1)

(1) 浅い岩礁の発達

海岸線に平行して、約200m沖まで、大小の岩礁が水面近くに広く点在し、その一部は、干潮時などに水面上に露出する。これらが、天然の防波堤となり、波浪のエネルギーを消去するので、秋から冬にかけて吹く西からの強い季節風の時も、内側は波も穏やかである。その内側には、岩礁の少ない湾(湾または海岸の船着場、船曳揚場)が数カ所あって、北前船も寄港できた。(図2)

(2) 蛇崩れの地先の岩礁

出雲崎町の西端は、昔から蛇崩れの丘とよばれ地すべり地で、その前面の海にも岩礁があつて、西からの波浪から出雲崎港を守る形になっている。

(3) 海岸線の方角

寺泊などの海岸線の方角はほぼ南南西から北北東向きだが、出雲崎はほぼ南西から北東向きで、西から吹く強い季節風の時も、波浪の当りは弱い。

(4) 豊かな海産物

この岩礁地帯は、もずくなどの海藻が繁茂し、さざえなどの貝類や多種の魚類が生棲し、漁業の宝庫となっている。ちなみに、現在のさざえの水揚げ量は、出雲崎がわが国で第一である。

(5) 漁村形成に適した長い海岸線

町の背後は山が迫っているが、浜辺との間の平地は約50～100mあつて、それが海岸線に沿って約6kmも続いているので、小型船漁業や町並が発展するのに都合がいい。

2 古代の出雲崎

(1) 大陸・西日本・畿内との関係

暖流の対島海流が、本州の日本海側に沿って北上しており、それによって、大陸や西日本や畿内と出雲崎周辺との交流が、先史や古代にあったことが考えられる。

(2) 国府や寺泊との関係

越後一の宮である弥彦神社のある弥彦山系の南麓は、新潟平野支配の戦略的位置にあり、古代の越後の政治・軍事・文化等の拠点たる国府が、このあたりにあったことが、考えられる。畿内からそこに至る陸路は北陸道で、出雲崎はその宿駅の一つとされている。また、当時の海路の基地の一つだったであろうことも、その優れた自然条件から推測できる。ただ、寺泊の方が上述の国府に近く、政治的に重要だったことが考えられる。しかし、出雲崎の港は、自然条件が優れており、両港は近距離にあるので、相互に補完的に利用されたことが考えられる。最近まで、海が荒れると、寺泊の船が出雲崎に避難してきたことから、それが推測できる。

3 中世の出雲崎

古代の場合と同様、中世の出雲崎については、詳しいことはわからない。しかし、戦国時代に、上杉の軍勢が佐渡遠征の際、出雲崎を根拠地にして往来した史実がある。中世末期、自然条件のよい出雲崎が、佐渡渡海基地として、重要性が増してきたことが考えられる。

4 江戸時代の出雲崎

(1) 戦国時代から江戸時代初め頃の出雲崎の動静

そのいくつかを出雲崎編年史から年代を追って拾ってみる。＜文明(1469～87)年中、上杉家、出雲崎に陣屋を設く。＞＜永禄2(1559)年、出雲崎の繁生、新潟の町と同じ。＞＜永禄11(1568)年、上杉謙信、出雲崎に宿陣。＞＜天正10(1582)年、上杉景勝、出雲崎に宿陣。＞＜慶長3(1598)年、堀氏、越後を領し、出雲崎に陣屋を設け、代官を置く。大久保長安、出雲崎の尼瀬に足軽町を立つ。尼瀬町屋180軒となる。出雲崎に旅籠版盛下女を許さる。＞＜慶長年中、佐渡運上金銀、出雲崎に渡海。＞＜寛永8(1631)年、尼瀬港築造成る。＞＜寛永14(1637)年、松平越後守、河海及船数を調査す(この当時、出雲崎は尼瀬と出雲崎に分けられていて、尼瀬は廻船6・廻船26・小廻船30・大小漁船81、出雲崎は廻船2・廻船11・小廻船26・大小漁船205となっている)。＞

こうして自然条件に恵まれた出雲崎は、当時の社会条件のもとでクローズ・アップされ、天領となり、代官所が置かれ、佐渡との往来の港で、佐渡の運上金銀が着き、北前船も寄港し、漁業も盛んで、それらに関連する様々な労働者・技術者・商人等が集まり、町は繁栄した。経済的に重要だったのは、貢米の積み出しだった。江戸時代は、公領米30万俵を、毎年この港から出荷している。諸国の廻船も寄港し、出船千そう入船千そうといはれる賑わいをみせた。

これらの船の出入りや繫留を可能にするには、港の修築が必要となる。それはどのように行なわれたか、江戸時代に描かれた地図等を参考に検討する。

(2) 江戸時代の出雲崎の地図

尼瀬の名主だった野口家に伝わる野口文書(現在、新潟大学付属図書館蔵)の中に、江戸時代の出雲崎の町や海中の岩礁などを図示した地図が3葉ある。1枚は、天保13(1842)年に描かれたもの(以下地図3とよぶ)であり、他の2葉(以下大きい方を地図1、小さい方を地図2とよぶ)には、年代の記録がない。しかし、地図1・2には、尼瀬稻荷町に陣屋が記入されており、この陣屋は、寛永2(1625)年より文化5(1808)年まで、ここにあったことが判っているから、地図1・2は、この間に描かれたものといえる。(図3・4)

(3) 地図の検討

a: 地図1・2の何れが古いものであるかは、明確にはいえない。地図2では、小坪の潤の外周に、防

波堤を採石で普請しており（図6）、地図1では、1ヵ所の岩陰に採石らしいものが数個散見できることから、地図2の方が新しいことが考えられる。しかし、尼瀬の御蔵所の裏に、地図1では門構えの家が続いているのに、地図2にはないことは、地図2が古いことも考えられる。

b：地図1・2は共に宮の下澗に、浜近くから突出した2条の堤形の細長い岩礁が露出している。これは古くからあった天然の防波堤と考えられる。

c：地図1には、澗の名前が5ヵ所記入されており、現在も同じによんでいる。これらが、少なくとも江戸時代から使われている呼称であること、澗があったこと、を示している。

d：地図2では、小坪の澗の外周をとり囲むように、多数の採石を積んだ普請のあとがある。これは、柔構造の防波堤の役割をはたしていた、と考えられる。

e：地図3になると、採石による築堤の普請は他の澗すべてに進められ、各澗は、自然の岩礁とそれらを繋ぐ形に作られた人工の堤で外波から守られている。普請した5ヵ所には、“御普請所”と書き入れてある。（図5）

f：各澗の露出した天然の岩礁の上に、合計37本の杭状の船つなぎ石が据えられている。（写真1）

g：各澗に船入口と書かれたところがあり、その脇の岩礁の上に、長い棒がたてられ、その先に杉の葉を球形に束ねたような目印がついている。最近まで、出雲崎では、毎年杉の木を切ってきて、先端の葉をのこし、そのしたの枝は切りすてて、沼標として岩礁の上に立てたという。江戸時代から続いていることが判る。（図7）

（4） 築堤普請の技術について

江戸時代のその詳細は不明であるが、明治以後も、港の改修等のため漁民の中に継承されてきた、動力を使わぬ伝統的な技術は、次ぎのようである。江戸時代の技術も、これらとほぼ同じだったと考えられる。

a：築堤方法 [A] 巻石・石積み法—巻石（ロクロでないと揚がらない重くて大きな石）を2列にしき、その間に転馬石（人力だけで上げられる石）を積む。[B] 巻石・木杵積み法—巻石を2列にしき、その間に木杵を組み、その中に転馬石を詰める。

これらの方法は、強い波に対して柔に対応し、有効に消波する。

b：採石方法 [A] 巻石の場合—3人が海底にもぐり、もっこの上に石を乗せる。海面上では、2隻の船を並べて結び、その間にセットした台輪をシャリキ棒を回して回転させ引き揚げる。[B] 転馬石の場合—3～4人が海底でもっこに乗せた石を、船の上から人が綱を直接ひいて引き揚げる。（図8・9・10）

海底から引き揚げた石は、港の修築だけでなく、加工したりして、土台石・側溝・敷石・石畳・墓石等につかった。他の町村にも売ったりした。

（5） 港の繁栄を支えた様々な技術

a：造船・船修理と船大工 漁船・廻船の港、佐渡渡海の港として、それらの船を造ったり修理するため、古くから優れた技術をもつ船大工が沢山住んでいた。

b：宮大工 航海に耐える船を造る船大工や堅牢な社寺を造る宮大工は高度な技術を要する。出雲崎には、船大工と共に優れた技術をもつ宮大工の集団がいて、出雲崎だけでなく、越後の信濃川添いの地域（中越地域）の建築をリードしたことは、すでに発表した。

c：その他、家大工・鍛冶屋・木挽き・左官等、様々な技術者が集まって、活気のある町を形成していたのである。

5 明治以後の出雲崎

（1） 明治維新後、天領も代官所も廃止され、運送や交通の主流が鉄道に移っていくと、港は寂れていき、出雲崎の多くの技術者たちは、東京等の新しい天地を求めて移住し、そこで技術を生かしていった。特に

、江戸時代の後期に、北前船等をとうして出雲崎と交流があった北海道には、技術をもったかなりの人々が集団で移住し、北海道の開発や発展に、技術的にも貢献したといはれている。江差等には、出雲崎の人々による町もつくられたといはれている。

（２）石油採掘と出雲崎の技術

地図１には、尼瀬に”草生水の潤”と書かれた潤があり、御金蔵のあったあたりの海浜には、むかしから草生水（石油）が、しみでていたことが判るが、ここでは、明治の初めまで、取り立てて採油はされなかった。しかし、明治になり、ランプが輸入され、全国に普及するにつれ、灯油の需要が高まり、明治６（１８７３）年、石坂周三が、尼瀬の海岸に米国式の小規模な鑿井機械で試掘—しかし失敗する。明治１０年ごろ、山手に２０の手掘り井戸が掘られたが、余り出油しなかった。海浜の手掘り井戸は水漏れで深く掘れないが、明治１３年、尼瀬の住人・加藤直重が、尼瀬の海岸に、木で井籠を組み、水止めの目継ぎをしながら重ねていき、掘りすすむ方法を考案し、成功する。（図１１）この水止め技術は、出雲崎に伝わる船大工の技術の応用である。こうして尼瀬の海浜に加藤式の手掘り井戸が多数掘られた。明治２１年に日本石油（株）を創立した内藤久寛は、尼瀬の浜辺に鑿井の余地はないが油脈が海中に接続していると考え、海面を借区し、海中の埋めたてを行ない、同年７月３井を開坑、採油に成功する。（写真２）日本石油史によれば、”寛永８（１６３１）年の築港工事をした防波堤の残骸がほとんどそのまま残っていたので、埋めたて工事はさして困難でなかった”という。江戸時代の工事を利用し、採石や埋めたて作業には、出雲崎に昔からある技術が応用されたはずである。また海中油田の掘削であるから、加藤式の技術が応用されたはずである。これは、わが国の海中油田の最初である。世界的にみても早く、この点については、さらに検討したい。内藤は、明治２３年アメリカより綱掘鑿井機械を輸入して、手掘り井戸にセットし、成功する。わが国の機械掘り油田の第一号である。機械掘りの高い槽を組んだり、木製の大きな動輪を造ったり、部品を修理したりに、出雲崎に蓄積された技術が生かされた。こうして、わが国の伝統的な技術と外来の近代技術が結合し、わがくに近代石油産業が、この地に発祥する。この近代石油産業発祥は、更に様々なわが国の近代技術の発祥・発展に繋がる。

（３）石油ブームから現在まで

やがて、尼瀬の石油資源は枯渇し、ブームは去った。

港について見ると、明治になって、大型船が用いられるようになると、今まで和船に有利だった遠浅で岩礁の多い出雲崎の港では、用をなさなくなった。港も放置され、石詰め枠の木枠も腐り、積石は崩れ、港は寂れた。

大正末、漁船にも焼玉エンジンが付けられ、沿岸漁業にも大きな変化が起こった。特に底曳網漁は、機械力の効果が大で、海底の魚類を一網打尽にとることができるので、資金のある人達は、競って大型底曳船を建造した。昭和のはじめ、出雲崎には、７隻の大型底曳船があり、荒天時の船溜りのために、昭和９年に近代的な築港が竣工する。これらは、昔から天然の港として利用し普請の手を加えてきた岩礁を利用して造られている。その後、大型船の持ち主達と小型船の漁師達の対立があり、その結果、大型船は新潟港に移動した。

戦後、昭和２２・２３年にかけて、尼瀬の小型船の漁師達は、自分達の手で築堤をおこなって、港を守ってきた。（写真３）２４年に、出雲崎大漁港建設期成同盟会が町ぐるみで結成され、２６年に第２種漁港の指定を受け、今の漁港が建設された。現在、小型船漁業を中心に、歴史のある活力のある町として再生しようと努力している。

この小論をまとめるに当たり、新潟県巻土木事務所および日本石油新潟精油所に御協力いただきました。ここに感謝の意を表します。

文献

佐藤吉太郎、出雲崎編年史、良寛記念館、1972

日本石油史編集室、日本石油史、日本石油株式会社、1958

鈴木豊吉、出雲崎の磯見漁1、中越の郷土史、14、1984

鈴木豊吉、出雲崎の磯見漁2、中越の郷土史、15、1984

鈴木哲・山崎完一、新潟県における町家の妻入り・平入りに関する調査研究、日本建築学会昭和60年度大会学術講演梗概集、1985

出雲崎町史編纂委員会、出雲崎町史民俗・文化財編、出雲崎町、1987

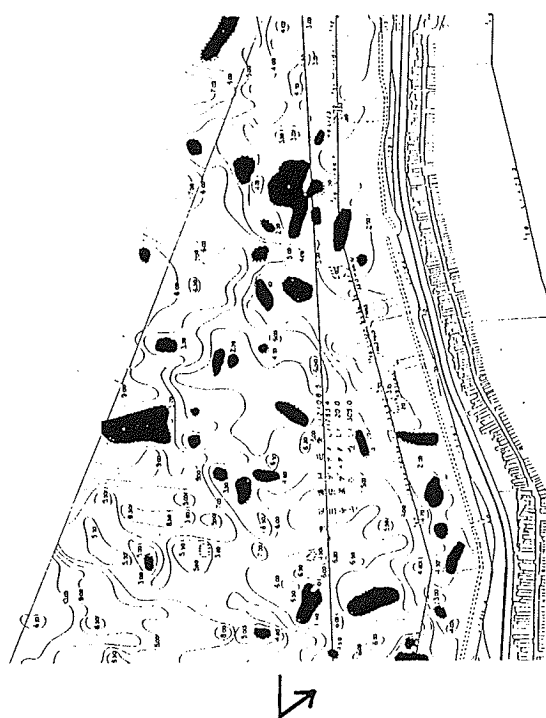
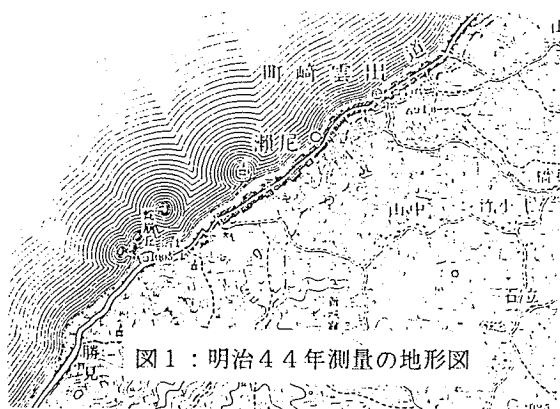
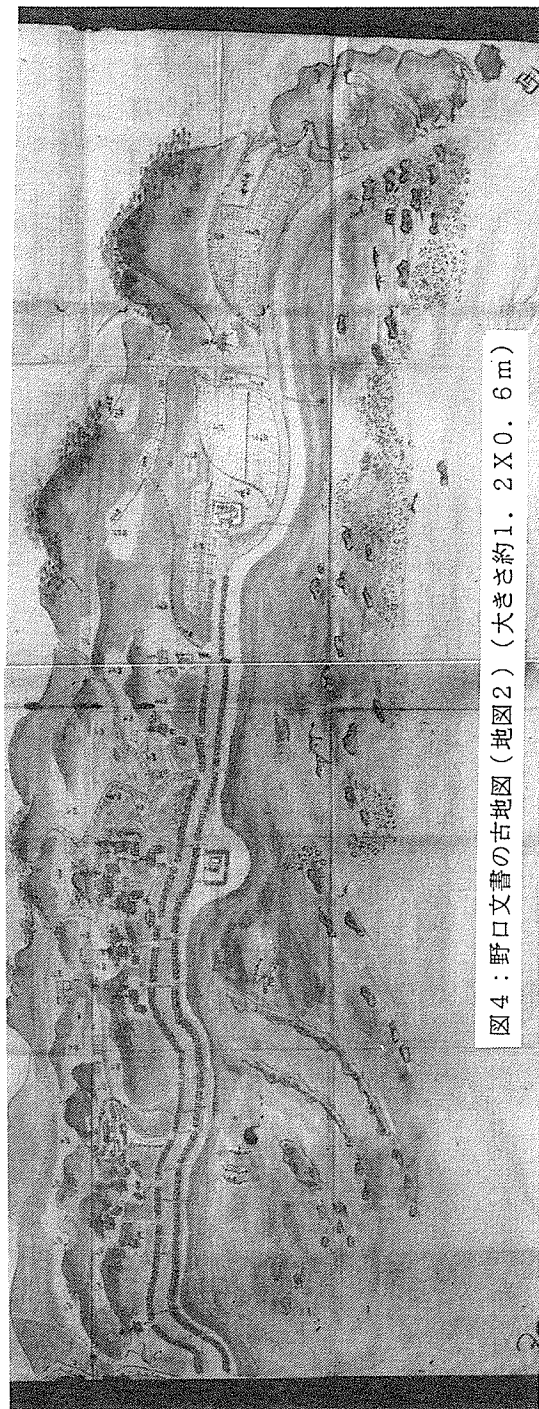
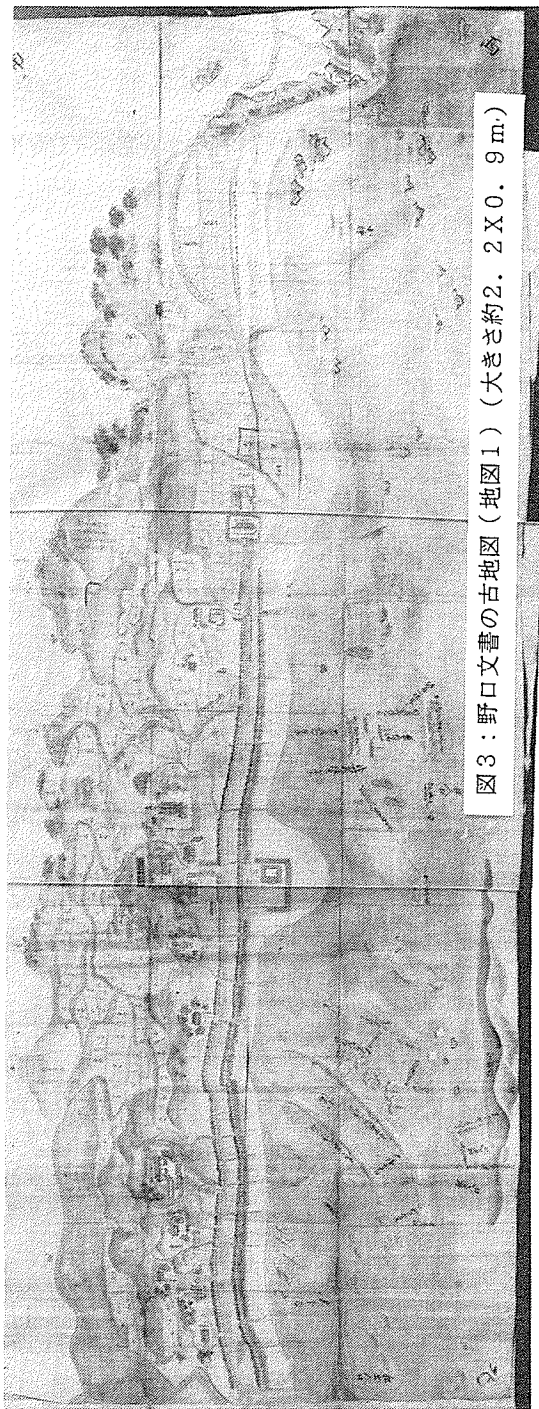


図2：現在の出雲崎漁港（新潟県巻土木事務所）
浅い所の岩礁を黒く示す



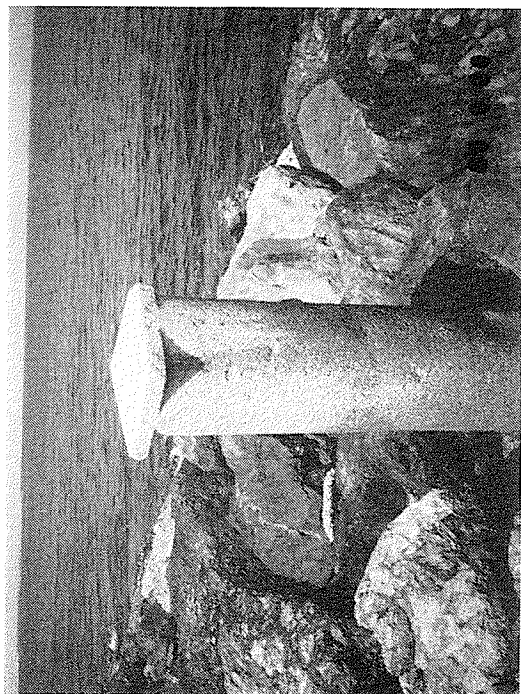


写真1：築堤上に現存する江戸時代の船繋石

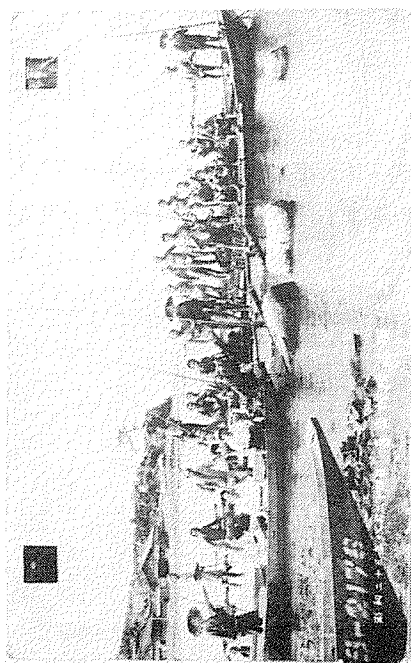


写真3：昭和22・23年、尼瀬の
漁師達が自分達で採石・築堤した時の写真

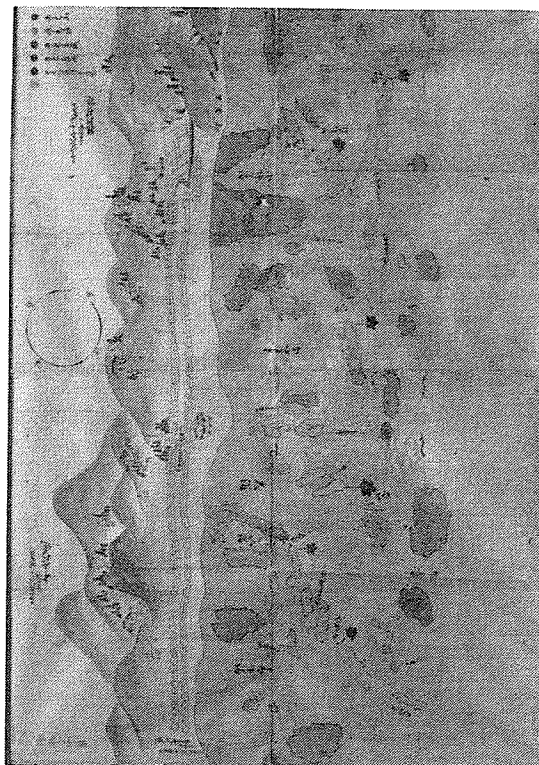


図5：野口文書の古地図（地図3）（大きさ約1.1X0.8mの半分）

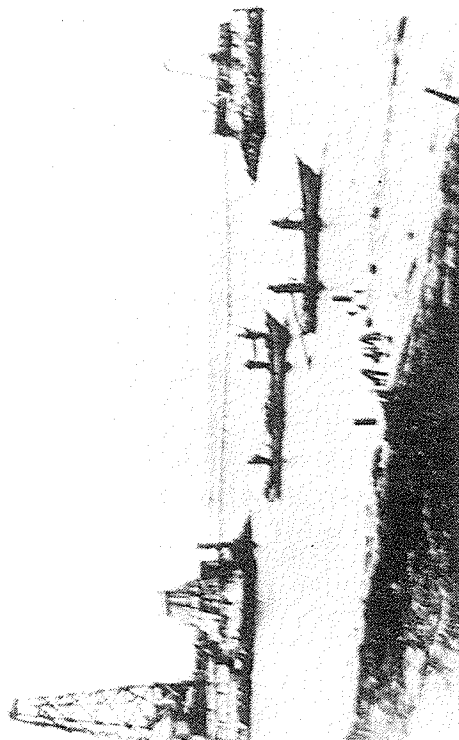


写真2：明治時代の海中油井

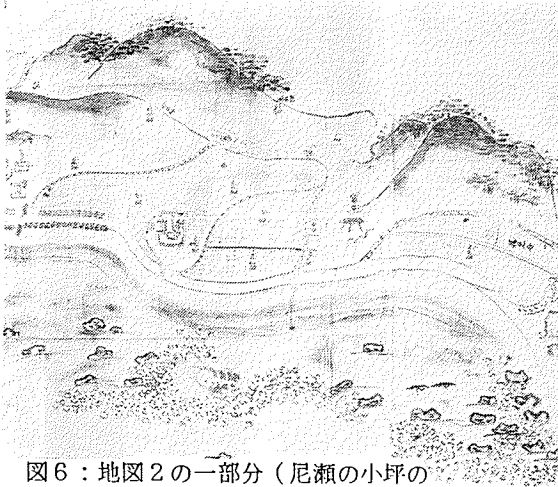


図6：地図2の一部分（尼瀬の小坪の
洞で普請を行なったことが判る）

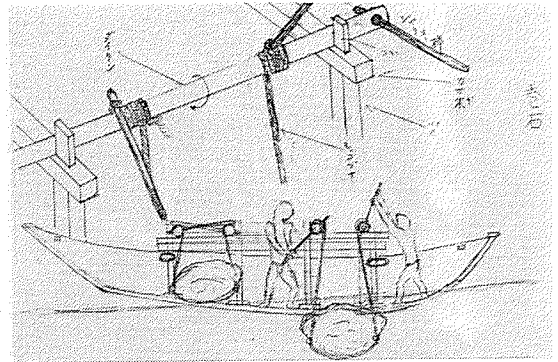


図9：水上に船2隻ならべ、その間に置いた
台輪をシャリキ棒で回し、もっこを揚げる

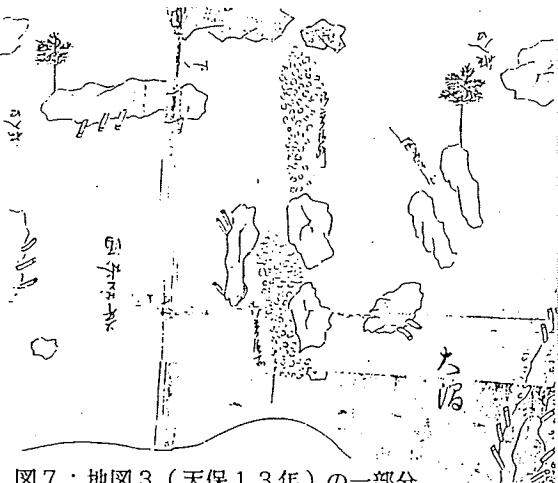


図7：地図3（天保13年）の一部分
（漂標・船繋石や、普請をやったことが判る）

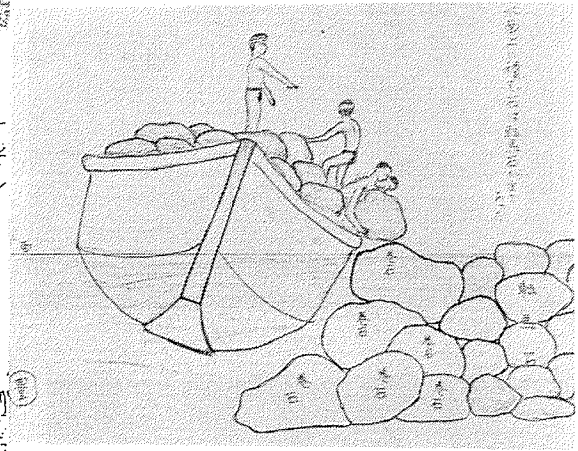


図10：巻石を2列に平行に敷き並べ、
その間に転馬石を積上げる

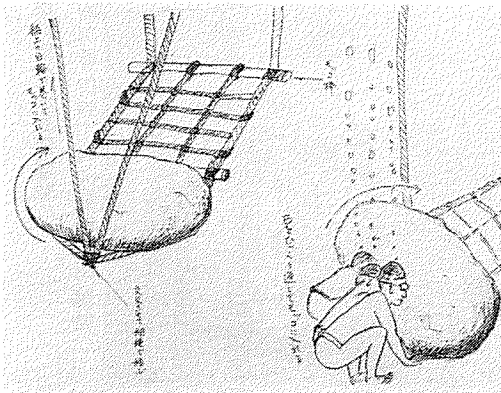


図8：採石作業（海中に潜り、
もっこに石を乗せる）

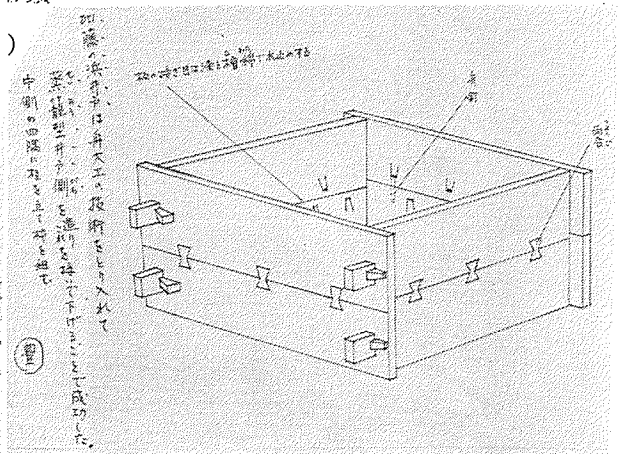


図11：加藤の浜井戸の図（木で井籠をくみ、
水止めの目継ぎをしながら重ねて、
油井戸を深く掘っていく）